



第 7 号

いせさき美尋

ひじん
景観サポーター情報紙

境・糸市・絹のまちめぐり

伊勢崎市景観サポーター実行委員会主催イベント

『境・糸市・絹のまちめぐり』を終えて

委員長 佐藤 好彦

平成 24 年 6 月世界文化遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」。その構成 4 資産の一つ「田島弥平旧宅」を生み出した境地区。

このまちには、蚕種業や糸繭商、製糸業など多くの糸偏産業で隆盛を極めた歴史があります。古くは江戸、明治、大正、昭和初期とその各時代を偲ばせる施設が多く残されています。

今回の市民参加のイベントは、私達「伊勢崎市景観サポーター実行委員会」にとって初めての事で企画、事前調査を経て開催へと進め、多くの会員の惜しみない協力によって無事終了しました。それはとても悦ばしいことと思っています。

私たちの故郷「伊勢崎」にあって、何気なく通り過ぎていたこのまちを、歩く速度で見つめ直してみました。路地裏や日光例幣使道に残る数々の施設をそれらがたどって歴史的背景に思いをはせ、秋晴れの心地よい一日を過ごしました。

今後も、新たな地で「ふるさと秘話」の掘り起しを行いたいと願っています。

最後に地元
の皆々様には
御理解と多大
な協力をして
いただき、感
謝の気持ちで
満ち溢れてお
ります。今回
のイベントの
成功は、境地
区住民のお蔭
によるものと
思います。あ
りがとうござ
いました。



赤レンガ倉庫前で参加者の皆さんとスタッフ一同

写真で観る「まちめぐり」の記録

冒頭で主催者側から
皆さんへご挨拶



委員長
副委員長
景観サポーター実行委員会

都市計画課長
伊勢崎市



◆旧赤レンガ倉庫

赤レンガ倉庫前で「境町の歴史やいわれ」を中心として、まちめぐり前の事前説明が行われました。
“いよいよ皆さんの気分が高まってきました！”

◆買場通り

明治26年(1893年)に繭・生糸・織物を中心とした常設の市場が開設されました。

現在はその面影はありませんが、僅かに当時の建物が残っており、いにしえの取引状況に思いを馳せました。

何と云っても120数年前の建物が現役で普段の生活の中に溶け込んでいます。

“驚きです。また、地元の年配者の方々は「牛馬の飼葉(かいば)」の意味としても親しまれていたようです。”



◆土蔵造りの商家その1

この建物は、境地区でも代表的な土蔵造りのものです。見世蔵として建築・活用されてきた建物ですが、外壁の一部が朽ち果てています。

そのことで建築構造が良く判りました。参加者の皆さんはサポーターの説明に興味津々でした。

“蔵の壁(木舞壁)構造はとてもすごいです。”



◆旧板倉屋薬局

西側に母屋は大正 12 年建築でもうじき 100 年を迎えます。

3 階建て部分は昭和 8 年に建築された「洋風建築」で当時の人々がめざした文化的な香りを伝えています。

母屋の庭先まで入らせて頂き貴重な見学が出来ました。家主様のご好意に感謝します。

(太平洋戦争当時は、B29 の監視所となった悲しい歴史もあるそうです。)



◆井筒屋



井筒屋店舗は、民家ではとても珍しい鯨（しゃちほこ）や卯建（うだつ）を備えており、建築主の心意気を感じます。

両建物とも家主様が自らご案内を頂き、貴重なお話しを承り大変有意義な見学となりました。

◆織間本陣跡



残念ながら織間本陣は既に解体されており記念碑だけの見学でした。サポーターの熱心な説明に参加者の皆さんは聞き入っていました。

もう少し！
ガンバレ！



◆絹の館



絹の館は機屋・金子仲次郎の住んだ屋敷で戦前の境町が養蚕業で栄え、機織り長者の繁栄が偲ばれる貴重な屋敷です。

昭和54年に当時の境町に寄付され市民の憩いの場として有効に利用されています。

参加者の皆さんはここでお茶とお菓子を頂きながらアンケートの回答を作成しました。(合資会社金子輸出織物工場の敷地は図書館も含め広い敷地を寄付したそうです。)



実行委員会の反省会

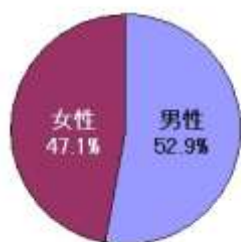
境・糸市・絹のまちめぐりの反省会として、今回のまちめぐりに協力していただいた土蔵造りの町屋の斉藤様を含めて、絹の館において、「絹」をテーマにお茶会を行いました。

当日は、「仙厓の指月布袋図軸物」「竹花入れ」「日月香合(こうごう)」、それから境島村の田島弥平を偲んで「桑仕立ての棗(なつめ)」などを用意し、和やかな雰囲気の中で、よき思い出と伊勢崎境のまち歩きなどの発展的な語らいが出来ました。

(景観サポーター 七條 清)

アンケート集計結果

参加者の性別



参加者の年齢



参加者の居住地



参加者の情報取得先



心に残った施設



【その他の主なご意見】

- ・古い建物が残っていることに感謝。旧伊勢崎は残念。
- ・古い建物を維持することの大切さを感じた。
- ・境町に住んでいながら裏道に町屋があることを知らなかった。
- ・古い建物を維持することの大切さを感じた。
- ・ゆっくり歩きたかった。
- ・説明よくわかりました。ありがとう。

【実行委員会のまとめ】

参加者の皆さんには概ね好感を持ってもらえたものと理解しました。今後は若い世代の方々の参加が望めるような企画を検討したいと思います。



深谷・区画整理とまち並み保存

今このまちは開発と保存の狭間で苦悩しています。それは、深谷だけの問題ではなく日本の多くのまちで取捨選択を迫られた歴史だったのです。効率、便利さとノスタルジー相反する思いが市民や行政に問いかけられたのです。最も戦後のわが国は自国の歴史や風習などを悪とし、ひたすら西洋化を善と勘違いしたのです。急速なスクラップアンドビルドを推進してきました。その時代は国民の多くがそれで素晴らしい未来に到達できると信じていたのです。

がむしゃらなエコノミックアニマルは団塊の世代のリタイヤと共に終焉を迎えているのではないのでしょうか。自分達の祖先が培ってきた歴史や文化、それらは外国に発信しても見劣りするものではないはずです。平成 25 年 12 月「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されたように外国人は日本の歴史や文化の素晴らしさに気づいているのです。

まちのデザインも今までの車（経済）優先の思考から人優先へと転換させる時を迎えているのです。超高齢社会に突入し日本中に高齢者、後期高齢者が溢れる時代となっています。反面少子化に歯止めがかかりません。

数十年前に計画した「広く真っ直ぐな道路」を強引に推進するのではなく、その地域の歴史文化を活用した個性溢れる都市計画を老いも若きも望んでいる時代となってきたのではないのでしょうか。歩きや自転車、シニアカーでの速度で移動する市民に

思いやりある都市デザインが求められる時代です。それは子供達にとっても安全で住み良いまちとなると思います。江戸や明治、昭和初期（戦争前）に造られた建造物は本物の材料を使い、日本の風土に根差した構造を備えているものが多いのです。それらを壊すことは数日ですが、再建するには材料探しから始まり膨大な費用が必要になります。つまりそれらは「まちの思い出であり、地域の宝」なのです。

（景観サポーター 佐藤 好彦）



深谷視察を終えて

高崎線を利用するので、名前は馴染みの深谷市に初めて訪れました。

深谷市の街なかを案内していただいたのは、NPO法人深谷にぎわい工房の方々でした。このNPO法人の拠点である「深谷れんがホール」で街づくり活動の経緯、概要を説明していただきながら、街なかを案内させていただきました。

旧中山道の宿場町であったので、江戸・明治時代からの街なみが残っている事は大きな遺産で、とりわけ「造り酒屋」が街なかにあったことが今の街なみを魅力的にしています。七つ梅（旧田中藤左衛門商店）跡は、深谷シネマ等になり、地方都市には見られない魅力的なスポットになっていると思いました。

街なかを案内していただき気づいたのですが、いわゆるチェーン店でない昔ながらの「飲食店」等が目に入りました。入ってみたい「喫茶店」もありました。このような店が多く存在することが街の魅力を高めてくれているのではないのでしょうか。

街歩きの魅力は、個性的な店、建物などを発見する楽しみだと思います。深谷市の街はその魅力が沢山残されていました。

それから、やはり今、深谷市といえば、渋沢栄一ではないのでしょうか。現在は、街づくりと渋沢栄一の繋がりはないようですが、深谷駅の駅舎だけでなく、なにか接点を見つけて街づくりに生かせることができないかと思いました。

（景観サポーター 角田三喜男）



深谷レンガホール



小林商店

渋沢栄一の生家

渋沢一族は当地、深谷市血洗島を開拓し、分家して数々の家を起こしています。

旧渋沢邸「中の家」（なかんち）もその一つで、この呼び名は地理的に真ん中に位置していたことが由来です。

この家に、後に日本近代資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一が生まれ、幼少期に従弟の尾高惇忠（富岡製糸場初代所長）に学問を学び、明治2年（1869年）に民部省租税正に任命され、この頃、明治政府が我が国最大の輸出品目の生糸生産の為の模範工場

を、政府自らが富岡の地に建てる重点施策を打ち出し、伊藤博文と栄一が担当となって富岡製糸場の建設が進められています。また、明治4年に昭憲皇太后（明治天皇の皇后）が生糸の生産の奨励の一助として、宮中で養蚕を試みたいとの希望を大蔵省に伝え、幼少の頃より学問、農業、養蚕、藍作りなどを仕込まれ、特に養蚕は、先進地島村（現在の伊勢崎市境島村）の影響を受けていた栄一が昭憲皇太后に謁見し、養蚕の諸準備についての御下問に奉答し、ご親蚕を行う事が決められ、その世話役として皇居に赴き、関係者に桑を植える適地、飼育に適する建物の選定と内部の設備などの指導をしています。

その後、この世話役は、若い頃から田島弥平の兄と先進地米沢へ蚕種の買い付けに出かけ、養蚕や蚕種育成技術を習得し、田島弥平とともに上州を代表する専門家だった田島武平が務めています。栄一の従弟の渋沢喜作の妻の姉しげが武平に嫁いでいることから、栄一と富岡製糸場、田島弥平、田島武平との繋がりを知ることができました。

また、渋沢栄一の経済に対する考えは、「倫理と利益の両立を揚げ、経済を発展させ、利益を独占するのではなく、国全体を豊かにする為に、富は全体で共有するものとして、社会に還元させる」というもので、この考えは、道徳経済合一説と呼ばれ、様々な困難を乗り越え、栄一が到達した境地とも言えるのではないかと思います。



中の家



「若き日の栄一」像

（景観サポーター 七條 清）

旧日本煉瓦製造株式会社のホフマン輪窯

深谷市街を後に北上するバスの車窓に大きな建物が覆われた煙突と明治の面影を今に伝える平屋建ての建物が飛び込んできた。

建物内に国重要文化財で旧日本煉瓦製造株式会社のホフマン輪窯 6号窯（以下、6号窯）が保存されている。同社は明治20年に渋沢栄一らにより設立され明治21年に1号窯の火入れが行われた。翌年以降、窯を増設して最盛期には6基もの窯が稼働していた。

しかし、昭和43年にレンガの製造を止めた。明治40年建造で現存する6号窯は18の焼成室を楕円状に配置し、1周120m余りのアーチ型レンガ積の穴倉である。一つの焼成室に詰め込まれるレンガは18,000個であり一度点火すると火を絶やすことなく一焼成室ずつ順番に火を入れていき1周18室の作業が終わるころには初めの室の焼成から窯だしまでが完了する。

続けて次の焼成の準備も出来るという仕組みであった。

小学生の頃、伊勢崎市内にレンガ積の織物会社の煙突が林立していた光景を思い起こした。同市内で使われていたレンガの多くも日本煉瓦製であったものと容易に想像する事が出来る。

私の記憶にあった伊勢崎の織物会社煙突は既に取り壊されてしまい、それを確認することもできない。
（景観サポーター 岡部 雅明）



ホフマン輪窯の煙突



ホフマン輪窯内部入口

編集後記

本号は「境・糸市・絹のまちめぐり」と「先進都市視察・深谷宿」を題材として発行させていただきました。まちめぐりは、市民の方々へ参加募集し景観サポーターがそのガイド役を務めるといった初めての行事でした。何度もの会議、現地調査を踏まえ無事に終了したことは皆様のお蔭であったと感謝申し上げます。また、深谷宿でガイドをしていただいた「深谷にぎわい工房」の皆様にも改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。（佐藤よ）

景観サポーター情報紙「いせさき美尋」とは？

美尋の「美」→多方面から考察した美しいもの。「尋」→素晴らしい景観を尋ね求める。対象物の本質の探究。

景観サポーターは、伊勢崎の自然、歴史、地域文化、先進性等景観の大切さ・素晴らしさ・美しさを多方面から尋ね（美尋）、景観の価値を学び・発見すべく研鑽を重ね、その発表の場を「いせさき美尋」と名付けました。

発行／いせさき景観サポーター実行委員会編集部

『いせさき美尋』景観サポーター情報紙第7号

平成27年1月29日発行

連絡先／090-1252-2509（佐藤好彦）